

ものがたり 慈濟

インドネシア

構造的に危険な住宅の改修 五千世帯の生活を変えた





撮影・黄筱哲

真心からの願力と行動

● 扉の言葉 文・證嚴法師 訳・濟運

真心を以て発心立願し、

共に善行し、力を合わせて福田を耕しましょう。

無償の奉仕をすれば祝福と智慧は増え、

世に災害が無くなり、幸福が来ます。



西ジャワ州ブカシ市で、2025年に支援を受けて住宅修繕を完了したアントンさん（左端）一家は、喜びに満ちた表情で改修後の室内環境を見渡していた。

（撮影・アリマミ・スリョ・アスモロ）

ジャカルタの狭くてじめじめした路地から中部

ジャワ州の山間部の村落に至るまで、構造的に脆弱な住宅は数え切れないほど存在している。

慈済は政府の大規模な生活困窮者援助計画に呼応し、対象となった五千世帯の住宅の改修を担い、彼らの生活を支える最も基本的な「安全」と「尊厳」を再建した。



慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】

善行を世界共通語にしよう

善耕／訳 4

【慈済のSDGs】

慈済が国連の舞台に立った

惟明、江愛寶、何慧純、葉美娥／訳 8

善行を見てもらい、複製してもらおう

【人物誌】長きにわたるカーブ制度の宿命が好転

林欣怡／訳 31

人助けに喜びを見出す

【證嚴法師のお諭し】

五十銭の記憶 慈済の始まり

慈願／訳 50

【新書のすすめ】『365日の静思語』上・下巻

法語と法悦をもっとシェアしよう

何慧純／訳 56

【特集】

インドネシアの危険住宅を改修

御山凜&林欣怡／訳 62

五千世帯の暮らしを変えた

【親と子と教師、三者の本音】

誰のために席を譲るのか

施燕芬／訳 79

【人文教育】

大学進学の実現 台湾で実現

何慧純&江愛寶／訳 84

【命の贈り物】

タンゴを踊る生活に別れを告げる

何慧純／訳 94

【行脚の軌跡】

心の目指す方向

濟運／訳 100

慈済の出来事 2/15 - 3/20

濟運／訳 106

善行を世界共通語にしよう

一月初めから、二期目の歳末祝福会と認証授与式が、暖かい冬の太陽の下に繰り広げられ、證嚴法師は宜蘭、彰化、嘉義、台南、高雄を行脚し、慈済大家族の心温まる毎年恒例の行事を円満に終えた。その期間中で最も感動的な光景は、間違いなく、各地のベテランボランティアたちが、自分のことが書いてある『伝家宝シリーズ』の書籍を持ち寄った時の様子である。本人が人生を語ったものも、詳細を書き起こしてもらったものも、それぞれの人生の記録であり、人間（じんかん）での貴重な菩薩行を証言している。

同じ時期、月刊誌『慈濟』も重要なマイルストーンを迎えていた。

二〇二四年七月から始まった『慈済SDGsシリーズ』報道は、今月号のテーマ「国連における慈済」で最終回を迎える。一年余りにわたって密着した詳細なドキュメンタリーは、近日書籍にまとめられ、慈済の六十年史の段階的証しとなって残るだろう。

法師はいつも弟子たちに、慈善奉仕は人としての本分であると説いているが、慈済人は依然として弘願を抱いている。それは、台湾発祥の静思という道義と慈済宗門の善行が、「清流」から「主流」へと変わり、人間（じんかん）仏教の影響力と認知度が台湾から国際舞台へと広がったことで、「慈済の論述は国際的に認められた」からである。

慈済は二十年以上にわたり国連で努力してきた。二〇〇三年、慈済は、国連広報局（DPI）と提携するNGOメンバーへの参加が認められ、

二〇一〇年には国連の経済社会理事会（ECOSOC）の「特殊諮問委員」となった。慈済は長年にわたって、女性の地位委員会（CSW）で、女性のエンパワーメントの話を共有し、毎年国連気候変動枠組条約締約国会議（COP）などの会議に出席するうちに、単なる参加者から「提唱者」へと変貌を遂げてきた。菜食、環境保全、循環型経済、気候変動対策、若者のエンパワーメントなど核心的なテーマで提言を行い、慈悲の実践を数値化し、検証し、再現することを可能にしている。

慈済は地元の力を重視している。三十二年前、「刺繍入りの靴」を履いた数人の女性が、インドネシアで最初の一步を踏み出し、慈善活動を展開した。同じ道を歩む地元民のボランテニアは増え、慈済の四大志業は広く知られるようになった。今月号の月刊誌『慈済』では、インドネシアの慈済人が国家

レベルの「貧困救済と修繕プロジェクト」に参加し、五千戸余りの貧困者に住宅の修繕を行い、その戸数は今も増加中であることを報道している。

また、仏陀生誕の地ネパールでは、慈済の蒔いた希望の種がすでに芽生え始めている。ボランテニアたちは職業訓練に力を入れ、そのうちの裁縫クラスでは、国家試験に合格して資格を持つ縫製技能士となった多くの女性を育成してきた。また、カースト制度のもとで続く貧困と弱い立場を好転させようと、専門技術を伝え、草編み工芸クラス、石鹸工房、希望のキノコ工房などを開設した。

世界の隅々で黙々と活動する全ての慈済ボランテニアに、感謝を申し上げたい。このような大愛と善の影響力を国際間に広め、響かせていこう！

（慈済月刊七二期より）



慈済が国連の舞台に立った

善行を見てもらい、 複製してもらおう

文・葉子豪（月刊誌『慈済』執筆者） 訳・惟明、江愛寶、何慧純、葉美娥

慈済が国際NGOとして国連に参加してから、既に二十年以上が経過した。人道支援での連携にとどまらず、

国連の場を活用した議題の提唱にも取り組んでいる。

気候変動対策行動、難民支援、循環型経済、若者のエンパワーメントなど、

慈悲に基づく行動を定量化、可視化、複製できるものにすることで、影響力を高める。

大 地震の後、ハイチの首都ポルトープランスでは、道路沿いに並ぶのは倒壊寸前の建物と瓦礫ばかりとなり、交通は完全に麻痺していた。慈済ボランティアと支援物資を載せた車の列が渋滞に巻き込まれると、護衛を担当する国連平和維持部隊の兵士が即座に車を降り、車列の両側と後方に立って警戒に当たり、白い装甲車が先導して混乱した中に防護空間を形成した。目的地の国立サッカー場に到着すると、場内と各出入口にも平和維持部隊が配置され、支援物資の配付が安全かつ円滑に行われるように管理していた。

これは、二〇一〇年一月、カリブ海の島国ハイチが大災害に見舞われた後、慈済が支援を行った時の状況である。武装による嚴重な警備は、ハイチが長年にわたり政治的に混乱し、震災によって社会システムが完全に崩壊した現実を物語っていた。

二〇〇四年、ハイチで政変が起き、大統領が亡命して、国は無政府状態に陥った。国連安全保障理事会は、加盟国の軍隊と警察部隊を派遣し、平和維持部隊を編成して治安回復に当たった。しかしその六年後、疲弊しきったハイチは、再びマグニチュード七・〇の大地震に襲われ

た。二十万人を超える犠牲者を出して
お、被災者の生命が危機にさらされてい
た。その時、すでに国連に認定されてい
た国際NGOの慈済基金会は、アメリカ、
カナダ、中南米のボランティアを迅速に
動員して、支援活動に投入した。

「ポルトープランスの空港は地震の被
害を受け、民間航空機は離着陸ができず、
国連の専用機が一日三便のみ発着してい
たため、私たちはその専用機の使用を申
請しました」と慈済基金会国際部長の曾
慈慧（ジン・ツーフウェイ）さんが当時



気候行動は、慈済が国際プラットフォームで提唱している重要項目の一つである。COP28のサイドイベントで、当時の慈済大林病院の林名男副院長（右1）が、慈済病院は菜食による炭素削減を実行していることを分かち合った。（撮影・ヘクター）

を振り返った。最初の支援チームは国連専用機で入国したが、隣国ドミニカ共和国から、もし陸路で国境を越えてポルトープランスの被災地へ行くとしたら、山道を八〜九時間かけて移動しなければならなかったという。

被災者は深刻な食糧不足に直面していたが、政府は機能が停止し、武装集団が横行していた。そのため、人道支援の現場では暴力的な争奪が発生する危険性を常に伴っていた。慈済の現地駐留ボランティアが、配付前に必ず確認しなければならぬのは、どの国の軍と警察部隊な

らば、武力と公権力によって現場の秩序を維持してくれるかということだった。平和維持部隊の指揮権を握るブラジル軍や、中東から派遣されたヨルダン王国陸軍は、慈済の支援活動を護衛した実績を持つ。

「メスイー（ハイチ語のありがとう）」。配付会場となった国立サッカー場では、慈済ボランティアが九十度のお辞儀をして、丁寧に梱包された支援物資を、敬意を示しながら手渡すと、住民は礼儀正しく感謝して受け取っていた。会場は人でごった返していたが、秩序を保っており、

治安を担当していた兵士たちにとって、これは予想外の光景であった。

「慈済は、私たちにハイチ人の別の顔を見せてくれました」とブラジル部隊を率いていたサンジネット指揮官が言った。

兵士たちが熱心に訓練を重ねたのは、群衆が暴徒化した場合に武力で制圧するためだったが、慈済ボランティアと被災住民の交流を目的にすると、「我々は暴動鎮圧のためではなく、支援のために来たのだ」ということを実感したという。

大規模災害支援に加え、難民支援においても、慈済と国連関連機関は、SDG

17「パートナーシップで目標を達成しよう」の主要なプロジェクトを実行している。二〇二五年九月、慈済タイ支部は国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）と書簡を交わし、長年にわたる協力関係を制度化して強化した。

「慈済の支援がなければ、多くの人は基本的に緊急の医療ケアを受けることはできなかったでしょう」と駐タイUNHCR代表のタミー・シャープ氏が言った。

難民は合法的な身分を持っておらず、常に逮捕や拘束、さらには強制送還の危険にさらされていて、就労、就学、医療へ

のアクセスは極めて困難である。そのような状況下で、慈済が提供する慈善救済、施療、語学やコンピュータの養成講座は、彼らにとって極めて大きな支えとなっている。「慈済と手を携えることは価値と意義に満ちている上に、生命を守る善行でもあるのです」。

マレーシア慈済人も国連と長期的に協力し、国内の難民に医療支援や生活・教育支援を行っている。曾さんは、「慈済はUNHCRのプロジェクト基金を申請し、ボランティアは私心を持たず、無償で難民を守っており、四半期ごとに報告書を提出して、UNHCRに活動内容を

説明しています」と説明した。このようなモデルが、民間の慈悲のエネルギーを国際的な政策枠組みに緊密に繋げているのである。

慈済に関する論述の国際的認証

長い間、国際人道支援に投入してきた慈済にとって、国連が提供してくれた資源は、思いがけないものだった。当初、国連の関連機関へ参加を申請したのは、利便さを求めたわけではなく、慈済の行動を主流の国際プラットフォームで認知してもらおうと同時に、さまざまな国のN



GOパートナーや政府機関と切磋琢磨して交流するためだった。

「上人は、私たちが国連で何かを達成することを要求しているわけではありませんが、善を呼びかけ、善の力を広げてほしいと言っています」。曾さんによれば、慈済が国連の関連機関に参加することにした理由の一つは、会務の必要性からであり、もう一つは因縁が成就したか

慈済と国連UNHCRは、長期的に各国で人道支援を展開してきた。タイでは、UNHCR代表のタミー・シャープ女史（右）と慈済タイ支部の林純鈴執行長が書簡を交換し、難民への医療、慈善と教育支援の提供に協力していくことを確認した。（撮影・蘇品純）



マレーシア・ジョホールバルの慈濟人医会は、UNHCRと協力して、ロヒンギヤの子供にワクチンを接種していた。(撮影・陳俊輝)

らだ。二〇〇三年、国連広報局（DPI）のコンサルタントを務めた朱亨湧（ジウ・ヘンヨン）さんは、慈濟と接触してから、慈濟のボランティアたちが世界中で成している事柄は、国連で発表され、世界中に

見てもらうべきだとつくづく感じた。そこで、国連広報局と連携する国際NGOに申請してはどうかとアドバイスした。国連本部は、アメリカ東部の大都市ニューヨークにある。アメリカの慈濟人

は慈済を代表して、国連に参加する第一歩を踏み出した。アメリカに長年住んでいる曾さんの記憶によると、最初の頃は、国連女性の地位委員会において、慈済がアメリカで進めていた施療や、慈善貧困救済などの志業の内容を分かち合っていた。当時は全員が門外漢だったので、国連の組織についても、提唱のポイントも、規律や作法も、全くわかっていなかった。ただ慈善、医療、教育、人文の四大志業の内容をプレゼンテーションするのだという思いがあるだけだった。しかし、二十数年間、行動しながら隊列を整えて学び、腕を磨いた結果、慈済人は、證嚴

と循環経済である。

「災害軽減と気候変動対策について、最も多く分かち合ったのは、モザンビークがサイクロン・イダイで被災した際の支援についてで、その成果は目を見張るものがありました。最近発表したのは、台湾花蓮光復郷のせき止め湖溢流による被害とシヤベルヒーローの出現、西アフリカ・シエラレオネ共和国とインドネシアのカリ・アンケ河流域における長期的な支援のケースについてです」。

曾さんは、慈済の主な提唱は全て、関連性のある国連所属機構と繋がっており、例えば、国際NGOのメンバーとし

法師の理念や世界中の法縁者の努力の結果を、国連が重視する人道、環境保全、サステナブルのテーマに的確に繋げ、一歩ずつ「慈済に関する論述の国際的認証」の理念を達成するようになった。

「私たちは、現在会議に参加しているだけではなく、もっと大事なものはテーマを提唱していることです」。曾さんは、現在慈済は国連プラットフォームで、四つの大きな議題を提唱して力説している、と言った。一つは、災害軽減と気候変動対策、次は、教育と若者のエンパワメント、三つ目は、難民と立場の弱い人々のケア、最後は、持続可能な開発

で、国連環境計画（UNEP）、国連防災機関（UNDRR）へ参加し、災害軽減と気候変動対策への対処を呼びかけている。さらに、国連気候変動枠組条約（UNFCCC）が開催する気候サミット（COP）に呼応してきたことであり、欠席することは許されないことを補足した。

気候サミットで菜食が声をあげた

慈済は、二〇一三年から毎年国連気候サミットに代表を派遣し、「肉食の代わりに菜食することで、温室効果ガスの排出を減らそう」と提唱している。そして、

リサイクル資源で作られたエコ毛布や福祉ベッドなどの緊急援助用物資も展示した。気候サミットはヨーロッパで開催されることが多いため、ドイツに在留している慈済ボランティアの林美鳳（リン・メイフォン）さんとドイツ人の夫、ヤン・ウルフさんがいつも慈済を代表して参加している。二〇二五年第三十回気候サミット（COP30）は、南アメリカ・ブラジルの「熱帯雨林の玄関口」と称されるベレンで開かれたが、二人ともヨーロッパから大西洋を越えて出席した。

林さんは、「国連の他の会議に参加する団体数と人数は、気候サミットに及び

ません。気候変動は、全世界のあらゆる場所と全ての人に影響するからです」と言った。二週間の開催期間中、彼らは毎日早朝から会場に行き、各会議とフォーラムに足を運んで宣伝したり、意見交換したりしたので、夜は八時、九時になつてやっと民宿に戻って寝ることもよくあった。毎日同じ時間にバスに乗っている二人を見た地元の人が、「もうすぐ着きますから、降りる準備をしてください」と親切に声をかけてくれた。

毎日、忙しく奔走していたのは、あらゆる発言のチャンスを逃さないためである。林さんは言う。「慈済が今回のサミッ

国連のプラットフォームを通じて、 慈済は何ができるのか？

• パートナーシップの強化

各国の政府機関及び国際組織との接触により、制度化され常態化した交流のかけ橋を築く。

• 世界に見てもらおう

地域の人道支援を深め、慈済の実践実績を世界に見てもらおう。

• トレンドを正確に把握する

政策の枠組みと方向性を理解し、対外的には国際基準を取り入れ、内的には専門性を高めることで、「慈済に関する論述の国際的認証」を実現する。

トで提唱したテーマは、食糧の安全保障です」。それは、被災地への援助と支援が慈済の国際業務の重点であるからだ。気候変動によって災害の発生頻度が高くなり、その威力も極端に強くなっており、短時間に人命と財産に損害をもたらすだけでなく、食糧生産にも重大な影響を及ぼしている。特に世界の人口がすでに八十億人を突破していて、全ての人に十分な食糧を確保するためには、気候変動対策を真剣に考えなければならぬ。

「植物性飲食は、温室効果ガスの排出削減において、大きな潜在力があります。飲食を、高炭素排出や不健康なパターン、



(写真提供・慈済モザンビーク連絡拠点)

モザンビークの現地ボランティアは、大愛農場を運営し、収穫した作物で貧しい人を救済している。地元の女性たちは、被災者からボランティアになり、貧困と食糧供給の不安定問題を改善した。その経験は、慈済が国連の関連機関で分かち合った重点でもある。

例えば大量の肉類と乳製品から植物性飲食に方向転換すれば、自らの健康に役立つだけでなく、地球の健康にも役立つのです」。

ドイツ人ボランテニアのヤン・ウルフさんは、フォーラムで再度、慈済が長年呼びかけて推進してきた菜食の理念を伝達した。十数年前の呼応者が少なくて困難な時代に比べ、今や、菜食は民間団体や宗教団体が呼びかけるだけでなく、一部の国の政府も政策ツールとして導入し始め、食糧システムの変革が進んでいる。

例えば、豚肉輸出大国のデンマークは、二〇二三年に世界で初めて、『国家

COP30の主催国ブラジルも積極的
に変革を推進している。ブラジルの学
校給食は世界二番目の規模だが、政府は
ベジタリアン食を増やし、国の未来の主
人公が、幼いから少肉多菜の食生活習慣
を身に着けるよう育んでいる。サミット
の主催側も、従来の食事の提供慣例を破
り、会場にある二つのメインレストラン
のうち、一つはベジタリアン食だけを提
供しているが、しかも見た目も味も素晴
らしいので、参加者に、「ベジタリアン
料理って、こんなにも美味しいのですね
」と感じてもらっていた。

林さんは嬉しそうに、「慈済と同じ考

植物性飲食行動プロジェクト』を始動し、
一億九千万ドル相当の経費を投入して、
菜食主体の飲食方式を推奨することで、
国民の健康増進と炭素の排出削減及び
その経済効果を目指している。会議に
参加した、デンマーク駐ブラジル大使の
エヴァ・ペデルセン氏は、林さんとヤン・
ウルフさんに、「政府は、変わる気があ
る会社と団体に資金援助します。製造業
であっても、消費者の食習慣を変えるこ
とを推進するのであれば、すべて補助
の対象になります。国内の全面的な変
革の先駆けになることを期待していま
す」と言った。

えを持った他の国際NGOパートナーが
長年にわたって提唱し、推進してきた
ことで、次第に主催者側の変革を目に
するようになりました。皆が力を合わ
せてこそ、広げることができるのです」
と言った。

宗教を超えて連携し導く

「百年の老舗」レベルの国際組織の赤
十字と比べると、六十年の歴史を持つ慈
済は後輩と言える。国際的な認知や、提
唱と宣伝、交流と協力などの分野には、
頑張る余地がまだ多々あるはずだ。長年

にわたり国連の活動や大規模な国際会議に参加してきた曾さんによると、初期の慈済が提唱した幾つかの項目は、今では多くの国ですでに実践されており、しかも成果を上げていることが分かる。宗教を超えた交流と若者を受け入れることは、将来、真剣に運営すべき方向である。

「例えば、慈済が以前に強みとしていたのは、循環型経済と環境保全におけるリサイクル活動でしたが、今では、インドがペットボトルのリサイクル技術で大きな成果を上げています。慈済骨髓幹細胞センターは、もはや最大のアジア系骨

髄バンクではありません。トップは、人口の多さに加えて、先進技術も備えた中国なのです」。

世界各国の政府と国際NGOの進歩を目にした曾さんは、慈済の貢献を原案としてまとめ、善い概念を国連などの国際的なプラットフォームに持ち込むことで他の公的部門や民間機構が検討できるし、さらにもう一步踏み込んで採用できるようになる。もし「国レベル」或いは「国際レベル」の規模で推進できれば、その影響力は侮れないものになるだろう。

「慈済は、物質と資源の面では彼らに及ばなくても、その強みは信仰と精神面

にあります。慈済が提唱するのは、慈悲と愛の展開ですが、定量化、複製化、検証ができるものでなければならず、そこから人々は学ぶようになるのです」と曾さんが言った。

近年、アメリカの政権交代で政策も変わり、海外支援の予算も大幅に削減された。これまでアメリカに大きく依存してきた国連は、資源を獲得するために、国

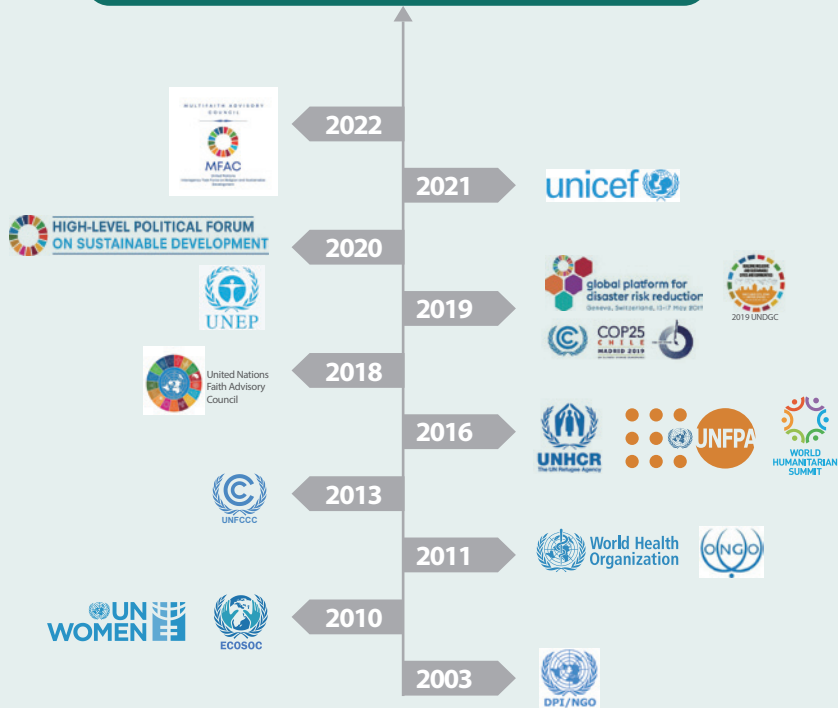
2010年、ハイチで世紀の大地震が発生した後、慈済はポルト・フランスの聖アラハンドロ教会で配付活動を行い、アメリカの慈済ボランティアが住民の先頭に立ち、異なる宗教の力を結集して共に平安を守ることが祈った。(撮影・劉子正)



国連の関連機関への参加を通して 世界と繋がる

- 2003 国連広報局 (DPI) のメンバーになる
- 2010 国連経済社会理事会 (ECOSOC) の
特殊諮問委員になる

これまで17の国連所属機関に参加



(資料の出典：慈濟2024年度報告書)

際 NGO と相互交流することで資源を確保しようとしている。これも宗教組織の影響力と宗教間の連携の重要性を顕著に表している。「例えば、国連難民高等弁務官事務所やユニセフは共に、宗教と諸宗教事務部門を増設し、国連食糧農業機関 (FAO) もまた、諸宗教委員会を設置しており、宗教の重要性が分かれます」。

宗教間の連携について、曾さんは、「慈濟は正に、『宗教と持続可能な開発に関する国際パートナーシップ (PaRD)』に積極的に参加しています」と言った。その団体は国連の直属機関ではないが、

メンバーの多くは国連加盟国の政府、または宗教背景を持った NGO で、慈濟はこのプラットフォームを通じて、広く宗教を超えた善縁を結び、世界的に影響力を発揮している。

「博愛、大愛、仁愛と名称は違っても、基本は似ています。宗教間の対話は、お互いの行動を理解し、暗黙の了解と共通の認識を持ち、尊重し感謝し合うことで、愛の基盤を築くことだ、と證嚴法師が言っていました」と曾さんが説明を付け加えた。

慈濟は、二〇二二年にはすでに、国連宗教間諮問委員会 (IATF) から信仰

組織評議会（MFAC）の共同議長に任命されていた。それは、慈濟の「仏教の為、衆生の為」という実践的な貢献が認められたことに依るものである。コロナ禍の間、慈濟はグローバルなボランティアネットワークを活用して、カトリック教会やイスラム諸国が緊急の防疫物資を調達するのを支援した。それは正に、宗教が慈善と結びついて、世界に貢献する具体的な例である。「無縁の人に大慈悲をかけ、相手の身になって悲しむ」という仏教の教えが、これらの行動に現われているのだ。

「慈悲の行動こそが、慈濟の教えの核

心なのです」と曾さんが言った。あらゆる実践は、仏教を国際的な主流プラットフォームに導くと共に、世界中のパートナーが宗教の垣根を越えて、善行を一緒に行うことを呼びかけているのである。

二〇二六年は、慈濟が創設六十周年を迎え、国連が「持続可能な開発のためのボランティア国際年」と定めた。六十年間で、慈濟が根付かせたボランティアネットワークと志業は成就し、国連が提唱する持続可能な開発の良い模範となつて大衆の力を結集し、共に地球と人類の持続可能性のために努力してきたのだ。

（慈濟月刊七一一期より）

人物誌

口述・ガйна・マンジ（インド慈濟ボランティア）
編集・陳文忠、丁碧輝（慈濟ボランティア） 訳・林欣怡

長きにわたるカースト制度の宿命が好転
物乞いの生活から頭を上げて

人助けに喜びを見出す

二千五百年余り前、仏陀は菩提樹の下で「全ての衆生は仏性を持つ」と悟った。その同じ土地で慈濟ボランティアは今、長い間のカースト制度による貧困の世代間連鎖を好転へと向けている。

——ガйна・マンジさんは言う。

「慈濟は、私が物乞いの生活から抜け出すのを手伝ってくれただけでなく、尊厳と自信を取り戻させてくれました。慈濟大家族の一員になったことを、私はこの上なく誇りに思っています。より多くの人に、助けられる立場から助ける立場になつてもらうために、私は良い模範になりたいと願っています」。



ガイナ・マンジさんは、ブッダガヤの地域ボランティア養成講座に参加し、合掌して『祈り』を唱和していた。(撮影・呂佩玲)

私の名前はガイナ・マンジです。今年六十五歳で、インド・ブッダガヤのスジャータ村出身です。

私と慈済との縁が結ばれたのは、二〇二三年四月九日、スジャータ村にあるスジャータ寺院に廻ります。その日、

慈済ボランティアが村に来て、ゴミやプラスチックを拾い、環境保護活動を行っていました。遠い国から来て奉仕する姿を見て、胸が熱くなり、「彼らができるのなら、なぜ自分にできないのだろう。私も力を尽くすべきだ」と思いました。

そこで私は、ボランティアの皆さんと一緒にゴミ拾いを始めたのです。

その後、私の家を訪問したボランティアは、私の暮らし向きが決して良くないことに気づきました。その年の五月から、慈済は私が自立できるようになるまで毎月、生活物資と、労働賃金に相当する現金を支援してくれました。また、ボランティアの皆さんが、生活を改善するために忍耐強く助言してくれたので、私は再び自信を取り戻し、人と人との間にある愛と善意を深く感じることができました。

特に忘れられない出来事があります。

この事故を通して、慈済ボランティアは使命感を持ち、見返りを求めない奉仕をして、善意で人助けをしているのだと理解しました。その精神に心から感動すると同時に、彼らを守り、動物も守ることで、人と動物共に平和に共存できるようにする責任が、私にはあるのだと思いました。

手のひらを上にしていた人が、
立志して模範となった

私はかつて、視覚障害者と一緒に物乞いをし、ご飯を食べていました。その時

その日、村で慈善訪問を行っていた或る慈済ボランティアが、気が立っていた水牛に突き倒されるのを私は目の当たりにしました。その人はその場で負傷し、手足を骨折して、緊急に病院に搬送されました。私はとても胸が痛み、しばらく心が落ち着きませんでした。その期間、私は毎日お寺で、彼女が一日も早く回復するように心を込めて祈り続けました。

それ以降、慈済ボランティアが村に来て家庭訪問を行う時、私は必ず竹の棒を一本持って同行し、牛がむやみに突進して誰かにケガをさせないようにしました。

の生活はとても辛いものでした。しかし、慈済と出会い、慈済の支援を得、そして自らも慈済の活動に参加するようになってから、私の人生は一変しました。

私は食事や物乞いに使っていたお椀を持って、スジャータ寺院の仏像の前へ行き、「今日から、もう物乞いはしません！自分の手で働き、慈済のために奉仕し、人を助ける人間になります」と誓いました。あの瞬間、私の心は感謝で満たされ、同時に尊厳と力を取り戻すことができました。

二〇二四年四月、村で大火災が発生し、私の家は焼け落ち、全てを失ってしま



ガイナ・マンジさん（右から三人目）の家は
2024年4月の大火で焼失したが、ボラン
ティアが直ちに駆けつけて、彼の生活再建を
支援した。（撮影・楊文輝）

ました。しかし、ボランティアの方々から服や靴、生活物資を届けに来て、途方に暮れていた私に再び希望を与えてくれました。慈済は、私が物乞いの生活から抜け出す手助けをしてくれただけでなく、活動を通して、自立心や自信をどのようにして身につけたらいいかまで教えてくれたのです。

私はベジタリアンですが、慈済が地域

社会で推進している理念は、私のライフスタイルであるシンプル且つ健康的な、そして善意に満ちた生活と大変よく合っています。私は自分の時間と労力を喜んで捧げたいと思っています。リサイクル

活動でも、慈善訪問でも、その全てに喜びと誇りを感じています。慈濟という大家族の一員として、自分の村や他の村の困っている人々を助けられることは、この上ない誇りです。私は良い模範となり、より多くの人が、支援を受ける側から、手のひらを下にして他人を助ける側に変わることを願っています。

多くの慈濟の活動の中で、私が最も心を動かされたのは「竹筒歲月」精神です。一つの竹筒、一枚の小銭が持つ力を決して侮ってはいけません。それは無数の善意の起点であると私は感じました。たった1ルピーという僅かなお金であつて

身がまさにそのように実践しているのです。収入は多くなくても、1ルピー銅貨を竹筒に入れる時、心の中は喜びで満たされます。なぜなら、それは出費ではなく、与える喜びであり、誰かを助けられるという幸福だからです。この行為は私の人生を非常に有意義なものにしてくれます。貧困は決して障害ではなく、奉仕する心さえあれば、無限の善い結果を創造できるのです。

村人がコインを投じ、笑顔で合掌して祈る姿を見ると、私は心から感動します。それは単なる金銭の寄付ではなく、心からの奉仕だからです。私は、この愛と善

も、誰かを温める力になり得るのです。一人が毎日それを実行し、やがて集団で行い、さらには村全体、ひいてはブツダガヤ全域で呼応する時、その善のエネルギーは、まるで川が大海に流れ込むように、計り知れないほど壮大なものとなります。多くの人の運命を変え、愛と希望を隅々まで行き渡らせることができるのです。

「たとえ貧しい人であつても、自分の能力の範囲内で、生活に支障のない限り、一枚のコインを投じるだけでも、他者に祝福をもたらすことができるのだ」と私はいつも村人たちに言っています。私自

行の精神が、私の代から次の世代へと受け継がれ、子どもたちの心の中の灯りとなり、「竹筒歲月」のチリンチリンという音が、代々伝えられる祝福と善の循環となるよう願っています。

**人助けすることは、
自分を変えることでもある**

私の心の中では、證嚴法師は生きている菩薩であり、真の「生き仏」のような存在です。法師の教えのおかげで私は自分を愛せるようになり、また感謝の気持ちをもって他人を愛せるようになりました

た。私は毎日、常に感謝の気持ちを心に抱き、福縁を造りだし、生命が祝福の源となるようにと自らに言い聞かせています。

法師のお考えにより、慈済ボランティアがブツダガヤに来られ、私は彼らと出会う機会に恵まれたのです。彼らは愛と行動でもって、「あなたは忘れられた存在ではなく、目に見え、大切にされ、尊重される『一人の人間』なのです」と示してくれました。

ある時、ボランティアの口から、法師の体調があまり良くないと聞いて、私は悲しみと不安に駆られました。毎日、スジャータ寺院に行き、法師が早く回復し、

引き続き弘法利生をして、慈悲のある智慧を広めて欲しい、と心からお祈りしました。

私は毎日、出かける前と帰宅後に、壁に掛けられた「福慧お年玉」に向かって両手を合わせ、「上人の足跡に続き、感謝と慈悲の心を抱いて、善を行い、人助けができますように」と祈っています。このような祈りは、私にとって力となり、あたかも法師が側にいてくださるよう感じています。

私は、ボランティアの人から携帯電話をいただき、その使い方まで教えてもらったことに深く感謝しています。それ



により、慈済との連絡がより便利になり、学びを継続できるようになりました。その配慮のおかげで、私は信頼され、重要視されていると感じ、また更なる人助けするための力をいただいたと感じました。

私の友人であるラカン・マンジさんは、慈済の医療支援を受けました。彼が足を骨折した時、

ガйна・マンジさんはスジャータ村で愛の心を募る活動を行い、小さな雑貨店を経営する村人のマール口さん（写真右）に参加を勧めた。（撮影・袁淑珍）



私は彼のために家屋の修繕を手伝い、また、約三週間にわたって付き添って世話をし、入浴の手伝いや家の片付けもしました。あの期間、私は「愛をもって奉仕する」ことと「忍耐強く寄り添う」ことの意味を、身をもって理解しました。

ラカンさんの世話をしていた間に慈済が支援したものは、物資だけでなく、

シロンガ村ではこの日、特別に村の代表の家からミシンを借りてきて、玄関マットの作り方を教えることになった(右の写真)。光の祭典「デーワーリー」と冬季配付の日には、現地ボランティアが両手でエコ毛布を捧げて手渡した(上の写真)。慈済の活動にはいつもガイナ・マンジさんの姿があった。

(写真提供・仏教慈済基金会)



愛と関心でした。ボランティアの人が果物を持って見舞いに来ましたが、彼は時々それを食べようとしませんでした。私は、医者 of 助言に従ってしっかりと食事を摂ることが早期回復につながるのと、根気強く説得しました。その経験は、「自分の気性を抑え、怒ってはならない。もっと多くの思いやりと慈悲心で以って、彼に接しなければならぬ」と、私に改めて気づかせてくれました。

私は彼に慈済のストーリーや精神を分かち合いました。初めの頃、彼は法師の話を信じず、慈済に対しても懐疑的で、アルコール依存の習慣から抜け

容することを学び、感謝と善意をもつて人々に接することを学びました。

委員の認証を授かる名誉と責任

二〇二五年十一月初め、私は台湾を訪れて、慈済委員の認証を授かりました。それは私にとってこの上ない誉れであると同時に、より大きな責任の始まりでした。スーツに身を包み、委員証を胸に付けることは、法師への最も真摯な誓いです。

今後、慈善、医療、またはその他の志業のどれであっても、慈済が必要とす

出せずにいました。しかし、私は彼を見捨てることなく、穏やかな言葉遣いと忍耐をもって別の方法で接しました。そして、慈済の医療チームを彼の家に招いて慰問し、長期的な飲酒が身体に与える害や、家庭や社会に与える影響、さらには金銭の浪費について説明してもらいました。

変化には時間が必要です。私は、彼がいつか酒を断ち、慈済に加わって私たちと一緒に善行することを願い、善と自律の道を歩むように、今後も説得を続けていくつもりです。他者を助けると同時に、私自身も変わり、手放すこと、包

る限り、または苦難にある衆生が必要とする時、私はより多くの任務を喜んで引き受けたいと思っています。これが、私が法師に対して立てた誓願であり、私の今生の使命です。

法師と慈済家族の皆さんが、慈悲に満ちた仏法の言葉で私を啓発し、導いてくれたことに、心より感謝します。法師のご法体のご健康で、永遠に存在され、これからも仏法を広く伝え、人々を教え導き、そして弟子たちが永遠の依り所とする仏法をもって、実践すべき愛を持ち続けるよう、心よりお祈り申し上げます。



(撮影・鍾文英)

訪台の夢が実現した！

文・王滢琇（高雄慈濟ボランティア） 訳・林欣怡

私

「には台湾に来て上人にお会いしたいという夢がありました。以前はとても手が届きそうにない夢だと思っていましたが、今は心が落ち着き、緊張もありません」。二年間の養成講座を経て、ガイナ・マンジさんとアミット・クマール・シンさん、ムハマド・アンサール・アリさんの三人のインドの慈済ボランティアは、二〇二五年十一月に台湾に里帰りし、認証を授かった。ガイナ・マンジさんは、愛の気持ちを発心立願した証として、竹筒貯金箱を持参し、法師に献上した。

十一月十日の認証授与当日、インドに長期駐在しているマレーシア・セラングール支部の蘇祈逢（スー・チーフォン）副執行長と師兄たちが、彼の服装を整えた時、彼は再び感動して涙を流した。「まさか台湾に来られるとは夢にも思っていませんでした。物乞いをしていた人間

が、手のひらを下に向けて施す人間になれたのです。私は心から感動し、感謝の気持ちで胸がいっぱいです」。

仏陀の故郷は、この世で仏教を実践する道場となり、寄り添いケアを施すだけではなく、仏法のもう一つの側面が広まった場所だと言えよう。物乞いをしていた体を今真っ直ぐに伸ばし、ガイナ・マンジさんはこう言った。インドに戻ったら、引き続き竹筒募金箱を作って愛の心を募るつもりで、もはや劣等感を感じることはないと言った。なぜなら、彼はもう顔を上げ、喜びに満ちて人間菩薩として生きていくことができるからだ。

「私は人と人との間には愛と善が存在するのだと深く体得しました。ブツダが召し上がったお粥と同じように、魂を養い、人生に希望という灯りを灯すものなのです」。（慈済月刊七〇九期より）

五十銭の記憶 慈濟の始まり

日々人助けの念を起こし、それを自ら力行すれば、小さな親切を積み重ねることで誰かを救うことができます。

毎日このような記憶を呼び起こし、皆の一点一滴の愛が水甕に入っていたからこそ、何時でも取り出して、人助けができたのです。

一滴の水が海に入れば、私たちの一滴もその中であって、慈悲の船を動かす、大愛をさらに大きくします。

時

間は素早く分秒を刻み、一時間から一日、そして一年三百六十

五日が知らぬ間に過ぎていきます。旧暦の春節を迎え、また一年が始まりま

した。毎日無事に過ごすのは決して容易ではありません。なぜなら人生は無常で、命はひと呼吸の間にあるからです。時間をかけて仏道修行を成し遂げるのですが、私たちは、過ぎた一年でどれだけ収穫を得たのか、どれだけ人間（じんかん）に尽くしたのか、どれほど仏法を人生の中で用いたのか、自分自身を振り返る必要があります。

新たな年と最初の一日を迎えられることに感謝しています。しかし、無常な生命は私たちに、新たな三百六十五日を与えてくれるでしょうか。ですか

ら、仏法は絶えず、「一日が過ぎれば、命もまた一日短くなる。水の少なくなつた場所で生きる魚に、何の楽しみがあるだろうか」と私たちに注意を喚起しているのです。時間と競争し、良い縁を逃さず、この人生の価値を發揮するのです。時間を大切にすることは、自分の慧命を大切にすることであり、精進して励み、放逸にならず、自らを律して慎むことなのです。

去年十一月末から行脚に出かけ、一年に一度の歳末祝福と認証授与式典を執り行いました。台湾を北から南周りで

一周して花蓮に戻り、二月に最後の式典を円満に終了し、年越しの準備に取りかかりました。遠くにいる慈済人は、オンラインで新年の挨拶をすると共に、彼らが在住する国で如何にして慈済を広め、皆と同じように精進をしているかを分かち合ってくれました。

海外の慈済人は、自力更生しながら慈済の志業を担っています。現地で災害が発生すれば、すぐに本部に無事を知らせ、次いで被災状況を調査し、現地で皆が協力して力を発揮しています。世界中の慈済人が、皆持っているこの

提げた彼女たちの語る「五十銭を節約して人助け」という方法が、市場の中に伝わったのです。

五十銭から始まった慈済は、台湾から世界へと広がりました。慈済人なら誰でもこの話を知らなければならず、当時の困難を忘れてはいけません。五十銭という金額は、生活にも、食卓のおかずの数にも影響しませんが、少ないお金も貯まれば、人助けができます。今日に至っても、生活の中で節約することが大切であり、毎日貯める僅かなお金で人助けができるのです。

ような愛こそが、清浄で無私の大愛なのです。人と人が接する時、元より相互に労わり合う気持ちを持つことが大切です。ましてや慈済は、仏法精神を以て人の世に関心を寄せ、助けを必要とする声を聞けば、発心して苦難を解いてあげています。これは、人間菩薩としての本分なのです。

六十年前、私が人を助けたいと望んだ時、三十人の主婦が私について来てくれました。彼女たちは、毎日市場へ買い物に行く時に五十銭を慈善のために貯金しました。当時、買い物かごを

日々、発心することを忘れず、人助けの一念を起こし、且つそれを自分で実践して励むことこそが、慈済が人助けを行う善法なのです。毎日この記憶を思い起こし、一点一滴の愛を水のように水甕に入れば、いつでも取り出して人助けができるのです。私たちの一滴一滴が流れこんだ海は、慈悲の船を運び、大愛をさらに広げることができるのです。

慈済はもうすぐ六十年が過ぎ、六十一年目が始まります。私はとても幸せです。大勢の皆さんが私を支持し、

なお師父として尊重して下さっていることに、私はとても感謝すると同時に満足しております。こんな歳になりましたが、人間（じんかん）に来たからには、自分の命を大切にしつつ、一日あれば一日の責任を尽くさなければなりません。皆さんも同じように、この責任を忘れないでください。自分の利益だけを求めるものではありません。利益だけを求めていると、永遠に苦しいものになります。もっと人々に奉仕し、善行と孝行をしてください。過ちがなければ、心は安らぎ、振り返ってみると、人生が価値あるものを感じるはずですよ。

私がいつも皆さんを菩薩と呼んでいるのは、皆さんが過去世で修行していたからこそ、今世で一緒に集まっているのだと信じているからです。現在は科学技術が発



達し、毎日早朝でも、指で触れるだけで私の説法を見聞きすることが出来ます。縁さえあれば、距離の遠近に関わらず、たとえ時差があっても、オンラインで繋がれば、荘厳で整った道場で一緒に修行することができ、精進する心さえあれば、私たちは永遠に一緒なのです。これもまた私の期待していることですが、私たちは生生世世存続し、永遠に仏道を歩むことで、揺るがない仏法に対する心を持ち続けることができますのであるのです。



正しい事は、もっと多くの人によって行われる必要があり、世に良い人が多ければ、この世は平和になります。社会が平安になれば、皆さんの事業も

安定します。たくさんの良い人と良い事が、人の世の幸せなのです。新年が順風満帆であるようにと願い、皆さんが日々歓びに満ちるよう祝福しております。（慈濟月刊七二期より）

法語と法悦をもっとシェアしよう

證嚴法師の智慧の法語によって、私は修行の道での拠り所を見つけた。物事の進め方と人としての道を理解し、人との間における是々非々から逃れることができた。法語と法悦をもっとシェアすることで、誰もが心を開き、自在な人生を過ごせるようになってほしいと願っています。



文と撮影・釈徳懋 訳・何慧純

『365日・日々の静思語』を創作しようという構想は、頭の中で二十数年間、堂々巡りしていた。

一九九三年十一月二十一日、私は花蓮の静思精舎に来て、證嚴法師のもとで修行を始めた。習慣的に、法師が開示した法語をメモに取り、優れた言葉をカードに書き写し、毎日一枚抜き取って、自らを戒め、励ましてきた。

時代と共に科学技術が進化し、これら書き写した法語カードは放置されたままになっていたが、数年前に「断捨離」という概念が心に芽生えたことで、スマホのスクリーン機能を活用して、ノートブックを全部デジタル化した。写真を撮りな

がら読み返していると、それら法語の偉大さに再び感嘆した。

そこで、それらの法語カードをデジタル化しながら、縁のある人にメッセージアプリで送り、ファイルにまとめた。その後、これらの法語カードを再びそのままにしていた。ある日、自分が発信した法語を目にした。「執着により煩惱が起こつたなら、放下すれば菩提へ至ります。執着心がなければ、煩惱が起きても菩提に至るのです」。私はもう一度心を打たれ、法語と法悦はもっと多くの人と分かち合うべきだ、とつくづく感じた。

それから、ある考えが頭にひらめき、法語をフェイスブックに投稿したが、数

日後、文字しかないのは単調すぎると感じたため、スマホで撮影した精舎の風景写真を文字に添えた。写真があると、解説も思いつくものだ。次第に今の『365日の静思語』が出来上がっていった。後に「静思園地」というウェブサイトからも支持され、コラムで連載するようになった。今はそれが終わり、本として出版された。「思いがけない幸運」とも言える。

法師の法語によって、私は修行の道での抛り所を見つけた。どのように物事に対処すればよいかを、また、人として広く良縁を結ぶ方法を知り、そして、執着心をなくすことで人との間の是々非々から逃れ、煩惱に惑わされることがなくなった。法師の法語によってあなたの心が開き、自在な人生を過ごせるようになると願っている。

広く良縁を結べば、多くの幸福が訪れます

證嚴法師の開示から

人との縁は、自ら広く結ばなければなりません。
良縁が一つ多ければ、その分の幸福が増えるのです。

モクセイの花の香りが漂う

所謂「成仏する前に人と良縁を結ぶ」とは、今生での出会いが良縁であれ、悪縁であれ、全ては自分が過去生で結んだ縁なのだから、成仏したければ、先ず人と良縁を結ぶことである、という意味だ。良い因の種を植えれば、自ずと良い果実が得られるということである。

徳和師父のささやかな天地は、そのモクセイ園であり、園内には千本以上のモクセイが植えられている。師父と摘み取り、選別したモクセイの花は、一部を蜜作りに使用していて、静思精舎の美味しいモクセイ餅はそこからきている。



それ以上に思い出されるのは、以前、師父がよくモクセイの花のハーブティーを大きなティーポットに入れて、事務所を一つずつ訪れては皆に提供していた

たことである。皆もそれを知っているのだ、その日にはカップを用意しておき、甘いモクセイの爽やかな香りに包まれたのだった。

心の静けさ —— 證嚴法師の開示から

過ちを犯して後悔するのは
煩惱です。

心の中に煩惱があつては、
智慧は成長しません。

心の中に戒めがあれば、

為すこと全てに
気持ちがいまより理にかなない、
心に静けさが訪れます。

同じ過ちを犯さない

侍者：「過ちを犯したら、どのように懺悔したらいいのでしょうか」。

師公（印順導師）：「同じ過ちを犯さなければいいのです」。

写真は静思精舎の一隅に咲いた満開のジャコウソウ。その花は、明け方に花を開き、夕方には散ってしまう。昼間に蝶や蜂を引き寄せて授粉し、日没には使命

が終わる。しかし、明日になれば、また花が咲く。開花時期には、毎日美しい花を咲かせて鑑賞できるため、「日々草」と呼ばれる。

花言葉は：希望と理想である。たとえば、毎日花が散っても、また新しい花が咲き、夜が明ければ、太陽の下に、また花が咲く。過ちをしつかり心に銘記し、二度と同じ過ちを犯さなければ、明日も斬新な一日となり、希望に満ちているのだ。



インドネシアの危険住宅を改修 五千世帯の暮らしを変えた



文・フイクリ・ファトニ、クスヌル・コテイマ、メッタ・ウランダリ（慈済インドネシア支部職員）

中国語訳・黄曉倩（慈済インドネシア支部 翻訳チーム職員）

日本語訳・御山凜&林欣怡

西ジャワ州ブカシ市に住む、
アントンさん（左端）一家は、
2025年に困窮世帯住宅修繕
の支援を受け、喜びと共に室内
の様子を見て回った。（撮影・ア
リマミ・スリョ・アスモロ）

ジャカルタの狭くてじめじめした路地から
中部ジャワ州の山間の村落に至るまで、
数万の住宅は脆弱な構造をしている。

慈済は政府の大規模な貧困支援プロジェクトに呼応して、
五千戸の住宅改修を担い、
貧困家庭にとって最も基本的な安全と尊厳の再建に取り組んでいる。

ある人にとっては、「家」は手の届かないぜいたく品である。インドネシアの都市部の片隅や遠隔地の農村では、今も多くの人が居住に適さない家で暮らしている。屋根は雨漏りし、床にはセメントやタイルも敷かれておらず、壁はグラグラして今にも倒れそうなほど脆

弱である。雨季になると雨水が室内に染み込み、乾いた場所がなくなり、強い日差しの下では、こもった熱気が逃げ場を失う。多くの家は空間が狭いだけでなく、バストイレなどの基本的な生活インフラの整備も遅れている。

インドネシア中央統計局（BPS）が

二〇二三年に公表した「住宅および環境衛生指標」によれば、全国で居住環境が不良と評価された家は三十七パーセントに達している。つまり、百戸のうち約三十から四十戸が、居住条件の改善を切実に必要としており、場合によっては、さまざまなリスクの原因となる可能性があることを示している。

この深刻な社会問題に対応するため、インドネシアのプラボウォ大統領は二〇二四年十一月、「三百万戸住宅建設・改修プロジェクト」を始動させた。このプロジェクトは主に修繕だが、一部は建て替えもある。農村部と沿岸地帯の

二百万戸、都市部で百万戸の住宅整備を進めており、極貧層と中低所得層の人々が、健康的な生活を送るための住環境を確保できるよう支援するものである。

この目標を達成するため、政府の住宅・居住区部（クメンテリアン・ペルマハナン・ダン・カワサン・ブルムキマン）は、民間企業及びNGOと連携して推進している。この中で慈済基金会は、そのうちの五千二十戸分を引き受け、パートナー団体の中で住宅改修数が最も多い。二〇二五年一月に工事が始まり、年末までに七百戸超が完成し、約四百戸が施工中である。



ボランティアは2024年11月、ジャカルタのカマラ・ムアラ村で第6期の住宅修繕をする前の訪問を行った。家主のココム・コマリヤさんは、木の床が腐って割れていたため、よく踏み抜いてしまうことがあると話した。(撮影・アリマミ・スリョ・アスモロ)

政府と民間が心を一つにして協力

将来までもが制約を受けるでしょう」と強調した。

慈済インドネシア支部の執行長の劉素美（リュウ・スウメイ）さんは、近年インドネシア経済は持続的に発展し、社会も進歩しているが、依然として多くの人が貧困ライン以下の生活をしていると述べた。そして「安心して暮らせる住まいがなければ、本人だけでなく次世代の

慈済インドネシア支部は二〇二五年末に三十周年を迎え、寄付している会員は二百三十万人を超えた。二〇〇六年にはすでに国軍および政府と協力して、低所得世帯向け住宅の建設支援を開始し、二〇二五年までの統計では、改修した戸数は千四百戸を超え、また、大規模地震

の発生後には、アチエ、パダン、パル、ロンボク島、ジョグジャカルタなどの被災地で村落の再建に取り組み、合計八千戸の住宅を建設した。

劉素美さんによると、今回はこれまでとは規模が異なり、戸数が多い上に対象地域も広範にわたるため、初期段階の進捗が比較的遅く、その原因は政府や住民との意思の疎通に時間を要したそうだと。そして「一部の住民は、改修期間中はどこに住めばいいのかと心配しています。そのため、私たちは家賃の補助もします」と述べた。

もう一つの課題は、各地域で適切な施工業者を確保することであった。「異な

る地域でこれほど多くの住宅を改修するために、十分な人手を確保することは容易ではありません。一つの地域で五百戸を施工する場合、数十の業者が同時に参画する必要があります。人員の確保に加え、工事の品質が基準を満たしているかどうかも確認しなければなりません。家が丈夫なのかどうかは、私たちにとって非常に重要なことです」と述べた。

家屋の修繕は、公共衛生を向上させる具体的な取り組みでもある。慈済ボランティアに同行して、プカシ市における支援建設前の訪問調査に行ったことがある、慈済人医会の懿彦（イーイエン）医師は、住宅が密集して換気の悪い住環境

では湿気がこもりやすく、肺結核などの感染症の温床になり易いと指摘した。また、インドネシアにおける肺結核患者の実数は公式統計を大きく上回っているとみられ、その一因は、こうした見えにくい感染拡大の構造にあると分析した。

路地に希望を灯す

修繕計画の調整窓口を務める盧徳汕（ルー・ドーサン）さんは、施工現場に足を運び詳細な調査を行った。その結果、最大の課題は路地の狭さにあることが分かった。多くの住宅の広さは二坪にも満たず、幅がわずか三、四十センチの路地

に面して建てられているので、資材の搬入が極めて困難なのだ。

盧さんは例を挙げて説明してくれた。バンドンはジャカルタより二カ月遅れて着工したが、進捗はむしろ先行している。そのため、バンドンから人員をジャカルタへ派遣し、応援しているそうだと。「バンドンには作業員が多く、路地も比較的広いので、資材の搬入がジャカルタより容易なのです」。

「改修は建て替えよりもはるかに複雑です。改修は解体と新築の両方を行うことを意味しますので、実質的に二度の工事を行うことになり、当然、より長い時間が必要になります」と説明した。地域



カマラ・ムアラ村第6期の住宅修繕計画は、2025年2月に始まり、慈濟ボランティアとインドネシア慈濟病院の職員、セダ・グループの社員、そしてアンダルシア看護専門学校の学生たちが解体作業を手伝っている。（撮影・クラリッサ・ルース・オクタビアナドヤ）

ごとに施工状況は異なるが、中部ジャワ州バニユマス県を例に挙げると、村と村の間の距離が遠く、地形も起伏に富んでいるため、建設作業員は山を登ったり坂を下ったりしながら資材を運搬しなければならぬそうだ。

盧さんは、当初この任務を担った際には不安もあったと率直に語った。住民に歓迎されないのではないかと心配になったり、あまりにも厳しい生活環境を目にすると、自分を無力に感じるのではないかと案じたりしたという。しかし、暗い路地に足を踏み入れ、老朽化した住宅の中へ入るたびに、壁もなく、屋根には至る所に穴が開き、排水溝の上に寝床が置

かれ、さらには貝殻を敷き詰めた床で暮らす様子を目の当たりにすると、必ずやり遂げなければならない、と自分に言い聞かせた。

「時には仕事が思うようにはいかず、不満を口にしてしまうこともあります。しかし、慈濟が支援しているジャカルタ、カマル・ムアラ村の住民があのような厳しい環境の中で何十年も暮らしてきて、一言も不平を言わないことを思うと、私にいったい何の不満があるのだろうかと思えます。私はできるだけ調整し、順応するようにしています。なぜなら、全力を尽くす価値のある使命だからです」。慈濟が重点地域としてジャカルタ、

バンドン、スラバヤ、デポック、ボゴールを選定したのは、これら賑やかな大都市の陰には、見えにくい多くの暗がりがあるからだ。盧さんは、「私たちは、貧富の差という溝を埋め、これら家庭が貧困の影から抜け出せるよう支援したいのです」と述べた。

モスクと学校が新たな姿に

カマル・ムアラ村は、北ジャカルタに位置する海沿いの漁村である。盧さんは、「実は慈済インドネシア静思堂のすぐ裏手にあるのですが、道が通じていないた

のだ。また室内の床が腐食していて、住民だけでなくボランティアも足を踏み外し、転倒したことがある家もある。

慈済は政府のプロジェクトに呼応する前、二〇一九年には既にカマル・ムアラ村で住宅の支援建設をしており、二〇二五年に第六期に入り、これまで四十八戸の民家、二棟のモスク、ならびにヌルル・イスラム小学校を建てた。新居の完成後は、入居者に対し少なくとも十年間は居住し、その期間に売却、賃貸、譲渡しないことを確約してもらっている。引き渡しの際には、ボランティアは炊飯器、扇風機、ガスコンロ、机や椅子、

め、大きく迂回しなければなりません。通常であれば車で約三十分ですが、渋滞時には二時間かかることもあります」と説明した。その家々は老朽化して損傷も著しく、しかも路面より低いので、雨季や高潮になると冠水し、壁は長期間水に浸っているため、倒壊寸前の状態にある。

ボランティアは村の極めて狭い路地を進み、ようやく各家庭にたどり着いた。家に入るには身をかかめる必要があり、体格の大きい人は入ることすらできない。浸水によって倒壊を防ぐために、住民が貝殻を敷いて地面をかさ上げしているの、室内の空間が低くなっている

ベッドなどの家具も用意した。

倒壊危険住宅の改修がもたらす効果は、カマル・ムアラ村において明確に示されている。ヌルル・イスラム小学校五年生のデノヴァン・ラマダン君は成績優秀で、毎年学年で一番を取っている。彼の自宅は二〇二四年十月に建て替えが完了した。彼は誇らしげに「以前は高床式の家に住んでいて、雨が降ると窓から雨水が吹き込んできました。今は家がとても頑丈なので、安心して暮らせます」と言った。

新居はデノヴァン君の学習意欲をさらに高め、家計も明らかに改善した。以前



は父親が粥を売って一家の生計を立てていたが、母親は慈済から提供された屋台を使って麵の販売を始めた。その後、家族はオートバイを購入し、食事配達サービスも行うようになった。母親は感慨深げに「この新居は本当に多くの恵みをもたらしてくれました。アッラーに感謝しています」と言った。

胸を張れるようになった一家の主

やわらかい朝日が、中部ジャワ州バ

カマラ・ムアラ村の住民、ハスナワティ（中央）さん一家は、嬉しそうに新しい家に入居した。（撮影・アリマミ・スリョ・アスモロ）

ニュマス県のソマカトン村に降り注ぐ中、五十三歳のラスマンさんは新居の扉を開けた。思い返せば、以前の家は、壁が木と竹でできていて、雨が降れば室内にバケツを置いて雨漏りを受け止めなければならぬし、床は泥だらけになった。今はただ、尽きることのない感謝の思いで胸がいっぱいだ。彼は「困窮世帯住宅修繕支援計画」の対象者の一人である。

ジャワ島の内陸部に位置するバニユマス県は、経済は主に農業や伝統的手工業に依存しており、住民には安定した雇用機会が不足している。山地や丘陵が多い地形が近代産業の発展には不利な条件と

なり、インドネシアでも最も貧しい地域の一つに数えられている。二十七の郡のうち、慈済の住宅修繕計画は十三の郡で進行中である。ボランティアは一軒一軒を訪問して状況を確認した上で施工を行い、本当に必要とする人々に確実に支援が届くよう努力している。

改修工事の間、ラスマンさん一家は家の裏手にある親戚の家に仮住まいしていた。彼は毎日工事の進み具合を気にかけて、時には手伝いをしたり、玄関先に座って日を追うごとに形になっていく様子を見守ったりしていた。また時には夜もそこで眠ることさえあった。それは工事現場を

慈済困窮世帯住宅修繕支援計画 5,020 戸の住宅所在地



竣工済み | 721

施工中 | 398 戸 調査済み | 1,872 戸 (2025年12月1日集計)

凡例:

- 慈済が建設支援に参加した州
- 慈済が住宅修繕支援を行った場所
- 首都
- 州都

見張るためではなく、この家がどのような家か、この家がどのよう
に少しずつ築かれていくのかを、自分の
目で確かめたかったからだと言った。
そして今、竹を編みこんだ壁の隙間か
ら風が吹き込んだり、穴のあいた屋根か
ら雨水が床に滴り落ちたりする心配はな
い。それは単なる新居ではなく、失われ
ていた尊厳を取り戻したことであつ
た。彼は今、胸を張り、希望を胸に前へ
と歩み出すことができる。

妻のムンフアリダさんは、これまで祈
る時はいつも、清潔で明るく健康的な家
を授かることができると願って
いた。しかし、それが実現する日はまだ

遠いように思えた。というのも、状況
見に来た人が、風のようにやって来ては
去っていったからだ。「でも、夫は慈済
を強く信じていました。私もそれに倣っ
て信じました。心にあるのはただ一つ、
感謝の思いです。私たちは一緒に努力し
ていきます。この家のために、そして子
どもたちの未来のために」。

ラスマンさんは農業従事者で、日当は
約五万インドネシアルピア(約四百七十
円)に過ぎず、日々の生活をかろうじて
賄っていたが、新築や老朽化した家の改
修など到底かなわないことだった。しか
し、ムンフアリダさんは諦めなかった。

彼女は村の子どもたちに勉強を教え、たとえ僅かな収入でも貯金をして、アスベストや間仕切り板を購入し、少しずつ古い家を補強してきた。

改修が完成し、ムンファリダさんが最も喜んだのは、夢にまで見た浴室とトイレがあることだった。「以前のトイレはあまりにも簡素でした。皆さんがこんなに素晴らしい設備をくださったことに心から感謝しています。どうかアッラーが皆さんに倍の祝福を与えてくださいますように」。

天井が低いジャワの伝統的な家屋とは異なり、新しい家は天井が高く、空間も広々としている。ラスマンさんは「部屋

が三つあって、一つは私と妻が使い、二つは子どもたちの部屋です。それにリビングもあります」と嬉しそうに言った。自分の部屋を持つことは、末の息子のウタコ君がずっと願ってきたことだった。ラスマンさんは興奮気味に、「あとは家具を運び入れるのを待つだけです!」と言った。

それぞれの家主の輝くような笑顔は、ボランティアチームに時間との闘いといえる使命感を感じさせた。単に住宅の構造を改修するだけでなく、新築のように且つ住みやすくしており、五千世帯を超える家庭の心を癒やしている。

(慈濟月刊七二期より)

親と子と教師、三者の本音

◎文・李秋月(高雄区慈濟教師懇親会ボランティア)

挿絵・鍾庭嘉

訳・施燕芬

誰のために席を譲るのか

問

社会では公共交通機関で席を譲るかどうかに対して、世代によって考え方が違います。教師として、このテーマをどのように子どもたちと話し合えばよいのでしょうか？

答・近年、学生や若者が高齢者に席を

譲らず、トラブルや不快感が生じたというニュースをよく聞きますが、社会

でも論議を呼んでいます。

では、個人主義が重視される現代において、教育従事者はどのようなことが

できるのでしょうか。

現代の道具をうまく利用する

新世代の子どもたちはデジタル機器と共に育ちました。もし、ショートムービーの力を活かせば、「事半功倍」の効果を上げることができます。

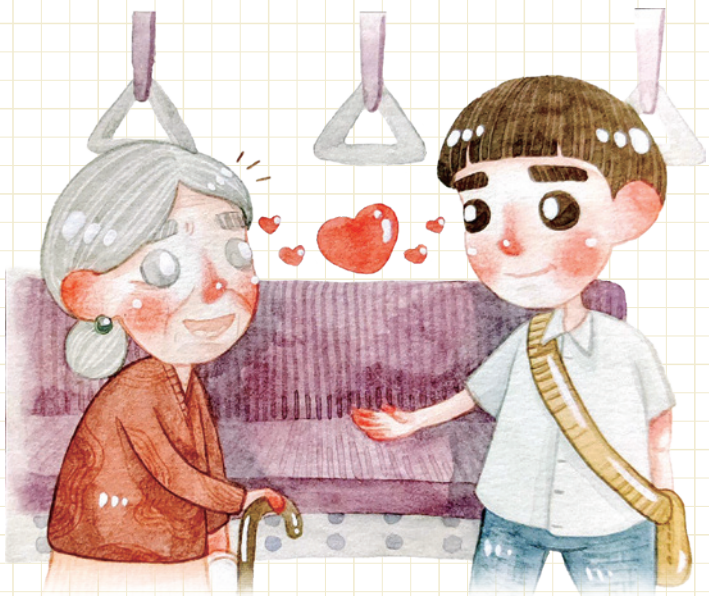
「冷淡な人」というタイトルの短編映画の内容は、とても意味深く、私はそれを生命教育の教材としてよく使っています。「或る上流階級の青年はいつも顎を上げ、鼻を上に向けて傲慢な態度を取り、近所の人とも交流せず、お年

寄りが転んでも助け起こすことはありませんでした。ある日、彼が道路を渡ろうとした時、一人の老婦人が彼の腕をぎゅゅとつかみました。その後、老婦人はにっこり笑って「ありがとう」と言いました。その瞬間、青年の心に触れるものがありました。その日から青年は進んで人助けするようになり、多くの人から「ありがとう」と言われるようになりました。やがて地域の人にも好かれ、誰からも愛される隣人へと変わったのです。

この映画を見終わった後、私は生徒を二組に分けて演じてもらっています。一

組は「傲慢な青年」、もう一組は「人助けする青年」を演じます。その後、ディスカッションをすると、ほとんどの生徒が「人助けする青年」の方が好きだと答えます。「だって、そういう人の方が人気者だから」、「笑顔のある人のほうがいいよ、冷たい人はいやだ」。

子どもたちの反応を聞いて、教育の目的を少しは達成できたと感じました。しかし、人格教育はすぐに身につくものではなく、先生たちの忍耐が必要



です。映画の場面を通じて生徒たちに
考えて、意見を共有してもらおうこと
きつとかなりの効果が出ると
思います。

さまざまな意見に耳を傾ける

教師は、クラスで「席を譲るべきか」というテーマを取り上げ、生徒それぞれの意見を聞いてみるのもいいでしょう。私のクラスで生徒たちに、この話題をディスカッションしてもらったことがあります。ある生徒は、「〃博愛座（優先席）〃をなくすべきだと思います。どの席でも、本当に必要としている人に譲

が悪い時も優先席に座っていいと思います」。

また、今の社会を懸念する声もありました。「今の子どもたちは、他人や生命を尊重する気持ちが薄れており、人の苦痛を理解できないのではないか」。その時授業で出た意見は様々でしたが、最終的な結論は、大多数の人が「〃席を譲る〃ことに賛成。なぜなら、席を譲るのは〃思いやり〃だから」というものでした。

これからの人生が幸福になるかどうかは、決して今の学業成績で決まるものではありません。神経科学者の研究

ればいいからです」と言いました。別の生徒はこう考えました。「台湾では席を譲るといふ文化が浸透しているけど、時にはそれが〃差別〃のように感じられます。〃博愛座〃という名称を〃優先席〃に変えた方がいいと思います」。

また別の生徒は、次の例をシェアしました。「韓国・釜山の地下鉄を見習ったらどうでしょう。彼らは〃ピンクライト〃という優しい措置を考えました。妊婦さんが専用のマークを身につけ、手すりの感知器に近づくとき音がでて、周囲の人に席を譲るよう知らせるのです」。さらにこんな意見もありました。「体調

によると、人を助けた時、脳内には〃プロラクチン〃というホルモンが分泌され、さらに〃ドーパミン〃や〃エンドルフィン〃の分泌も促します。このドーパミンとエンドルフィンこそが、私たちに「幸福感」をもたらす源なのです。

證嚴法師の静思語をご覧ください。「奉仕することは最大の収穫です。なぜなら、与えることができる人は、与えられる人よりも幸福だからです」。この言葉は、奉仕することのみがより多くの喜びと幸せを得ることができる、ということを意味しています。

（慈濟月刊七〇七期より）

大学進学の夢 台湾で実現

母は、洗濯の仕事で得られる収入では、私を大学に通わせることはできないと言った。しかし、慈濟は私の人生を変え、手が届かないと思っていた夢を叶えさせてくれた。

私

の名前はマリセル。フィリピンはレイテ島のオルモック市で、六人兄弟の五番目として生まれた。父は私が幼い頃に亡くなり、母が洗濯の仕事で生計を立ててきた。雇い主がよく変

わるので、収入は限られ、次のご飯が食べられるのかどうかも分からないのが常だった。

私は、小学四年生の頃からお金を稼ぐために働き始めた。週末に母と一緒に雇

い主の家に行って洗濯や草取りをし、学校が休みの日にも毎朝八時から午後五時までサトウキビ畑で働き、給料をすべて母に渡していた。暑い時、その仕事は一層辛さを増したが、私は歯を食いしばって耐え、母の負担を少しでも軽くすると同時に、学校を卒業したいと願った。

二〇一三年に強い台風三十号（ハイエン）がオルモック市を襲い、フィリピン近代史上でも多くの犠牲者が出た災害となった。強風は私の家の竹と漆喰でできた壁を倒して、ヤシの葉とプラスチックの波板でできた屋根を吹き飛ばし、私たち一家四人は、テーブルの下で

身を寄せ合って風雨を凌いだ。前の晩の食事が鍋に残っていて、雨水に浸かってしまったが、生きていくために食べることにした。

「家がなくなったら、夜はどこで寝ればいいのか」。家の建て替えは、私たちにとって非常に難しい事だ。当時私は十四歳で、元々休学してアルバイトで生計を支えていたのだが、台風の後は仕事がなくなった。地方で仕事をしていた姉も収入が多くなかった。家計の助けにはならなかった。まさに絶望のどん底にいた時、慈濟ボランティアが私たちのコミュニティに来了。まるで家族



2013年、非常に強い台風30号がフィリピンに大きな被害をもたらした。慈済ボランティアは、甚大被災地レイテ島オルモック市の現地調査を行った。(撮影・博麗妮)

のように温かく励まし、暗闇に光を照らすように、私たちに生活を立て直す勇氣と力を与えてくれた。

二〇一五年、慈済の支援建設によるオルモック大愛村が完成し、入居が始まった。自分が安心して住める家を持って、

これ以上あちこちに引っ越さなくてもよくなるなど、私はそれまで一度も思ったことはなかった。以前は家族全員が一つの部屋に寝ていたし、夜になると一台の

石油ランプの明かりだけが頼りだった。新居に引っ越してからは、自分の部屋が

あり、初めて家で電気が使えるようになった。夜間に宿題をする時にも照明があるので、目を悪くすることもなくなった。私にとって、その灯りは希望の象徴であり、明るい未来を照らしていて、一生懸命勉強する意欲を高めてくれた。

私にも人助けする力があつたのだ

ある日、慈済が大愛村で配付活動を行っていた時、ボランティアが心からの誠意を以て敬意を表し、腰をかがめて食糧を村人に差し出していた光景が深く印象に残った。彼らは与える側でありなが

ら、頭を下げる人でもあるのだ。そのような善良さと謙虚さに私は感動した。

その中には、ユニフォームをきちんと着用した若者たちがいて、整然として規律正しくしていた。彼らの振る舞いは一般の村人とは大きく違い、礼儀正しい上に愛を携えており、週末には大愛村でリサイクル活動をしたり、村の年長者を助けたりしていた。私は初めて、若者がコミュニティで無私の奉仕をしているのを見た。そして、自分も彼らと同じようになりたいと望んだ。これが、私が慈青の道を歩み始めたきっかけだった。

私と慈済青年ボランティアたちは、大
事得られる収入では、私を大学に通わせるのは無理だ、と言われたことがあるので、高校を卒業した時、私は将来に不安を感じていたが、慈済はすべてを変えてくれた。手が届かないと思っていた夢を叶えてくれたのだ。

愛村での家庭訪問、環境の緑化、リサイクル活動、緊急災害時の配付などをして、クリスマス休暇中は招かれて讚美歌を歌ったりもした。また、受け取った寄付金で米と野菜を買い、村で最も助けを必要としていた人に届けたこともある。何回かの奉仕を通じて、私は共感と慈悲を体得し、それまでになかった喜びに心が満たされた。たとえ、貧しい家庭の出身であっても、私には他人に希望を与える力があるのだ。

二〇一七年から慈済基金会の奨学金を受給し始め、中学校を修了する頃から高校卒業まで継続した。母から、洗濯の仕

当時、慈済の李偉嵩（リー・ウェイソン）おじさんが、「證嚴法師が、あなたたちに台湾の慈済大学で勉強するチャンスを与えてくださったのです。全額奨学金だけでなく、毎月の生活手当も支給します」と言った。彼はまた、「この世界はとてんも広く、違う国で新しい文化や言葉を学べば、将来自分が成長するだけで



なく、もっと多くの人を助けることができようになるのです」と言った。あの日、私は家に帰ると泣いてしまった。大学に行く夢が叶うチャンスに出会ったからだ。

私たちは先ずマニラで三カ月間、中国語のレッスンを受けた。二〇一九年に台湾へ来ると、慈済大学中国語センターで一年半、中国語を勉強した後、私はメディア学部に進学した。

2015年、オルモック大愛村が完成し、マリセル一家は水道と電気と自分の部屋がある新居に引っ越し、彼女も慈済青年ボランティアに参加した。(写真提供・マリセル)

机の前に座って涙を流した日々

故郷を離れて大学に進学するのは容易なことではない。というのも、学習する上で言葉の壁が大きく立ちほだかったからだ。あの頃、私は毎日よく眠れず、いくら努力しても成績は伸びなかったのだ。授業が終わって寮に戻ると、机で泣いていたものだ。偉高おじさんが忙しいのは知っていたが、ある日我慢できなくなって、おじさんに電話をかけた。「授業の内容が理解できないので、単位を落とすかもしれないのが心配です」。

おじさんは、「もし不合格になったら、

先生にあなたの学習状況を説明してあげよ。もう一度チャンスをくれるよう頼むから、君はただ頑張って勉強を続けられる。あまり心配しないで！」と答えてくれた。

おじさんの励ましを聞いて、私は学習上の困難に勇敢に立ち向かえるようになった。その時、二〇一八年に台湾でグローバル慈青キャンプに参加した時のことを思い出した。私は初めて、たくさんの方の前で、フィリピン・オルモックの青年ボランティアを代表して話をする事になったので、とても緊張して脚は震え、唇は真っ白になっていたら、幸いに



も偉富おじさんが私と一緒にステージに上がり、静かに後ろに立ってくれた。偉富おじさんはまるで父親のような存在だ。私が困難に直面した時に助けてくれる。「どんな問題に直面しても、決して軽々しく諦めず、勇敢に乗り越えよう！」といつも私を目覚めさせてくれる。その時から、私は授業に行くのを怖がらなくなった。私は真剣に先生が教えていることに耳を傾け、寮に戻るとその日の授業内容を何度も繰り返し復習した。幸いクラスにはもう一人、インドネシア人のクラスメートがいたので、私たちは互いに励まし合い、一緒に頑張ることが

できた！

私はずっと、夢を諦めず、時間を無駄にしてはいけない、と自分に言い聞かせてきた。もし諦めて手ぶらで家に帰ったら、證嚴法師がくれた貴重なチャンスが無駄にしたことになる。私がスランプに陥って苦しんでいた時は、家族や慈済の法縁者たちが絶えずサポートしてくれた。また、證嚴法師の『静思語』が私を大きく啓発してくれたことに感謝している。

慈済は、私を助けてくれただけでなく、いかにして他人を助け、励ますかを教えてくれた。證嚴法師と慈済ボランティアの寛容さは、私の運命を変えたただけでは

ない。おかげで私は、将来自分の力で社会に恩返しをしたい、と発願することができた。彼らが私を助けてくれたように、見返りを求めず、もっと多くの人を助きたいのだ。今、私はフィリピンに戻り、慈済眼科施療センターに勤めている。私は證嚴法師の教えを胸に、もっと多くの人と分かち合い、慈済を知ってもらいたいと思っている！（慈済月刊七一〇期より）

マリセルは2019年に台湾の慈済大学中国語センターで中国語を学び、一年後、メディア学部に進学した。2025年6月に卒業し、7月にフィリピンに戻ると、慈済フィリピン眼科施療センターで働き始めた。

（写真提供・マリセル）

タンゴを踊る生活に 別れを告げる

中年の頃に発症したパーキンソン病は、

淑枝（スウヅー）さんの体を縛りつけただけでなく、

家族全員の心も苦しめた。

大林慈濟病院の軽安居（長期療養施設）に入院したことで、
中医と西洋医の治療とボランティアの付き添いによって

心を開き、大きく踏み出すことができた。

淑

枝さんは、若年性パーキンソン病を患い、体が硬直して行動
がとても困難になり、五十一歳から「タンゴを踊る生活」が
始まった。つまり、ご主人は毎日タンゴを踊るように彼女を支えな
がら歩くことで、様々な日常的なことをこなしていた。

彼女は西洋医学の検査や治療を受けることを望まず、普段は、健
康食品で体調を整え、そうした生活を四年間続けた。何事も一人で
世話してきたご主人は、次第に体の限界に近づいていた。娘も、な
ぜ母親が病苦に苛まれても、医者にかかろうとしないのか、理解で
きなかった。病に縛られた淑枝さんの心には、死を望む気持ちも芽
生えた。

夫婦は、大学時代のクラスメートで親友でもある、大林慈濟病院
の林名男副院長夫妻の勧めで、大林慈濟病院に併設されている「軽
安居」を見学した。医療チームが入居患者のために楽しい雰囲気

作り、愛に溢れているのを感じて入居することを決めた。

医療チームは、淑枝さんの心と体の状況を理解すると、治療に対する彼女の選択を尊重して、中医による治療を勧めた。中医師の心のケアと交流を通して、彼女も最新のパーキンソン病治療について知ることができた。そこで西洋医師の私は彼女と初めて会うことになり、彼女は発症後の経緯を全て語ってくれ、私も心の支えになるような言葉を与えた。それから会う回数を重ねるうちに、彼女は治療について私の提案や薬の使用を受け入れてくれるようになった。

薬を一週間ほど服用すると、彼女は、まるで普通の人のようにゆっくり歩けるようになり、側で支える人がいなくても、自分で立てるようになった。それを見たご主人は冗談混じりに、「四年間も妻に騙されていたので、まるで詐欺に遭ったみたいですよ。治療を受け

れば、自分で行動できるのですね」と言った。

今までは、行動が不自由だったため、安心できる空間を求めていた淑枝さんだったが、軽安居に入院して三カ月が経った頃、勇気を出して部屋の外に足を踏み出し、廊下を歩くようになった。私はよく診察終了後に彼女のところに行った。中医師も彼女を気にかけて支えてくれた。軽安居で一年間を楽しく過ごした後、体が動くようになったと感じた淑枝さんは、家族と相談の上、退院して高雄に移住することにした。

高雄での新しい生活が始まると、毎日家の対面式キッチンを五十周ぐるぐる回って、筋力を維持した。三カ月ごとに大林慈濟病院へ再診に来る時、私たちは彼女を励まして力付けた。そして、看護部長やソーシャルワーカー、ボランティアがそれぞれ休みを調整して



集まり、彼女の誕生日を祝った。

高雄に引越して一年後、彼女は家から出て、家族と一緒に近くのスーパーへ買い物に行った。久しぶりにこの家族に笑顔が戻った。

證嚴法師は、「愛は人間（じんかん）の一番幸せなパワーです」と言っている。人と人の出会いはすべて縁であり、医療チームと患者の出会いも縁である。私たちのチームはこの力を利用して、彼らを幸福にしてあげたい。愛はいつも側にあることを彼らが信じていると願っている。(二〇二五年三月二十日ボランティア朝会より)

(慈濟月刊七〇四期より)

心の目指す方向

◎文・釋徳仇／訳・濟蓮

宗教を信仰していれば、心の目指す方向は定まり、他の人や物事に影響されて偏ることはありません。



人文志業の社会的責任

十二月二十五日、人文志業の蕭毅君（シャオ・イージュン）、欧宏瑜（オウ・ホンユウ）、林天来（リン・テイエンライ）師兄たちが、ボランティアの余碧真（スエー・ビージン）、婁明慶（ロウ・ミンチン）師姉たちと共に、十二月十九日から二十一日まで

開催された閑渡人文芸術ウィークの活動について共有しました。上人は「社会を美しくするためには、善の人にならなければなりません。人を善に導くためには、善い活動を多く催し、善い人文風を創造する必要があります」と述べました。上人は、慈善、医療、教育、人文の四大志業全てに人文が必要であり、各志業に

は人文志業の参加が欠かせませんと指摘しました。「縁と機会があれば、参加して広めるべきです。これが人文志業の社会的責任です。善と美を創造することが人文です。善と美を創るには、もちろん教育が必要です。とにかく、私たちは人間（じんかん）で慈善人文の社会風を作りたい。出さなければなりません。台湾には多くの善い行動や善い活動があり、慈濟以外の団体も多くのことを行っていますから、そのような善を繋いで広めたり、他の団体が閑渡志業パークで講演活動を行えるようにしたりすることもできます」。

上人は、「善意や善行は、広く人々に知らせる必要があります、特定の範囲内だけに留めてはいけません。大衆に善の美を示し、感じてもらうべきです」と強調しました。また、「善い行動には説明が必要です、その内容を理解してもらう必要があります。例えば、閑渡の志業パークの近隣にはペガトロンやアスースなどの企業があり、そのリーダーたちが長年にわたって慈濟と密接に交流していますので、共にイベントを開催することができます、この地域の人々が皆で参加できるようになったのです。地域に人文的特色を作り出す



(撮影・林宗儀)

◆ 第四回「関渡人文芸術ウィーク」が12月19日から21日まで、台北の関渡静思堂で盛大に開催された。3日間のイベントは「芸術×植物感覚×心の繋がり」をテーマに、ベジタリアン食材のマルシェ、心の講座、親子参加のイベント、そして公益活動を一堂に集め、食と娯楽を楽しめると同時に感覚と心で何かを得ることのできる文化的な祭典を作り出した。多くの人が家族連れで参加し、賑やかな会場が都市の最も美しい風景を形成した。今回の芸術ウィークは、人文への関心と環境保護の理念を引き継ぎ、地域の人情と食文化を取り入れ、善意を伝えた。

ことで、徐々に活動範囲を広げていくことができませんし、さまざまな業界の方々にも参加を楽しんでもらえるのです」と述べました。

「これは不可能なことではないと思いますが、ただ皆さんには忙しい思いをさせてしまうでしょう。しかし、興味のある人は行動力があり、行動すれば多くのことを学び、理解するので、自分の

智慧を増やすことができ、他者を見て自分の知識を高めることができます。私は皆さんが真剣に台湾のために尽力していることを知っています。台湾を良くしたいのであれば、人文を用いて教育し、人文を用いて浄化し、人文の力で善の気風を活性化させましょう。皆さんが活動を盛り上げ、教育的意義や価値を示していることに感謝しています」。

選んだ道を心して理解する

十二月二十六日、日本支部副執行長の小野雅子姉の母親である徐徐逢金（シユウ・トゥフォンジン）姉姉と妹の徐翠君（シユウ・ツエイジュン）、徐雅珊（シユウ・ヤーシャン）姉姉たちが、李映青（リー・インチン）姉姉に付き添われて精舎に帰ってきました。翠君姉姉は榮譽董事の認証を授かりましたが、アメリカに戻った後で委員の養成講座に参加したいと言いました。

懇談の中で、上人は、「人生で大変な時

道を歩むことでもあり、そこには探求するに値する教えがあるので」と述べました。

「社会の中では複雑な人事や物事に遭遇しますが、心の目指す方向が定まっていなければ、困難な境遇に出会った時、簡単に引きずられてしまいます。時には一念の偏りで、すべてが間違ってしまうこともあります。もし信仰があれば、心も方向が定まり、偏ることはありません。ですから、慈済に入る縁に出会った時は、単に盲目的に追随したり、誰かが慈済は

にだけ仏法に救いを求めるといふのは、間違った考えです。仏法が伝える宗教の道理こそが、人生の主旨であり、どう生きればよいのかを教えてくれるのです。人生に主旨がなければ、ぼんやり過ごしてしまいます。ですから、宗教を信仰していれば、あなたが自分で選んだ人生の道を、着実に歩ませてくれるのです。だからこそ、私はあらゆる正しい宗教を尊重しているのです。慈済人が仏教を信仰していなくても、敬虔な心で、正しい信仰心を持てば、私はそれを支持します。皆さんが慈済に入ることは、正しい宗教の

良いと言ったから、それに調子を合わせたりするのではなく、慈済の良さを心から理解する必要があります」。また上人は、委員の認証を授かるために養成講座を経験することで、自分が選ぶ道への理解がより明確になると述べました。「本当に慈済に入るのであれば、慈済は人材を必要としています。逆に要求もありません。ですから、一つまた一つと要求を克服し、自分はやり遂げたと確信することで、一層心を定めて前に進んでください」。

（慈済月刊七・二期より）

アフガニスタン Afghanistan

● 2025年8月、東部でマグニチュード6強の地震が発生し、5万人余りが被災した。慈済と国際救援委員会は協力しながら、地理的な困難と複雑な時局を克服して冬季の配付活動を行った。今年2月から折り畳み式ベッド、毛布、冬を過ごす物資パック、衛生用品パック及び1、665世帯分の食糧パックを震源地に近いクナー省の山岳地帯に届けた。配付活動は国境付近の戦闘のために一時、中断したが、4月初めに終える予定である。

タイ Thailand

● 慈済は6年続けて国連アジアパシフィック持続可能な開発フォーラムに参加した。第13回はバンコクの国連会議センターで開かれ、今年には台湾、マレーシ

ア、シンガポール、フィリピン、タイなどからの19人が慈済を代表して出席し、アジアパシフィック地域での援助と支援のモデルを共有すると共に、様々な慈善団体や宗教団体と交流した。(2月24日～27日)

モザンビーク Mozambique

● 慈済のサイクロン・イダイ災害に対する支援建設プロジェクトで、23の学校の一つで、ベイラ市にあるエストウツロ小学校が落成した。全国最大の小学校で、46の教室を有し、2月27日に引き渡し式典と新学年の序幕式が行われた。

● 2月28日、ニヤマタンダ中学校が引き渡された。新設された36教室と元々あった30教室を合わせると、全国で最大の中学校となった。

● 4つの大愛村の中で最も規模が大きいグラグアラは、2月28日に二段階目の1、227戸が引き渡された。サイクロン・イダイ災害後に建てられた大愛村の3、132戸の引き渡しは全て完了した。

イギリス UK

- 慈済は「女性、信仰及び気候ネットワーク：拡大させるための急進的な協働」国際フォーラムに出席し、17の国と8つの宗教の代表者と共に、ウィンストンハウスに集った。慈済基金会国際長の曾慈慧さんが、慈済のシエラレオネとスワティニで進められている環境保護推進者プロジェクトについて報告した。（3月2日～4日）

ベトナム Vietnam

- 慈済とハイフォン市友好協会は、トゥキ町とラク・フォン町で大愛の家の引き渡し式典を行った。8カ月間の企画と施工を経て、慈済が8億ドン（約500万円）を負担して、4世帯の貧困家庭のために、居間と寝室、バストイレが備わった新居を建設した。支援を受けた家主は、「新居はもう雨漏りの心配がなく、やっと安心して暮らせるようになりました」と興奮気味に語った。（3月6日）

フィリピン Philippines

- ボホール島トウビコン町で歯科の施療が行われ、クリーニングと抜歯を1,103人に行った。台湾と日本及び現地ボランティアが会場の予定に合わせ、午前2時半から設置を行った。2日間に14人の歯科医と47人の助学生、青年ボランティアたちが奉仕し、数多くの住民は小型船で海を渡って受診に来ていた。今回の施療では、かつては助学生で今は慈済職員のレジャネさんが総まとめ役を務めた。支援を受けて人生を反転させた人として、離島の住民が貧困のために医者に掛かれない困難を軽減することで、恩返しした。（3月7日～8日）

アメリカ USA

- 慈済は第70回国連女性の地位委員会（CSW70）に出席した。台湾、フィリピン、シンガポール、アメリカのボランティアと職員たちが8回のサイドイベントと4回の座談会を開催し、どのようにしてシンガポールで「共学共善」

環境を造り出し、フィリピンで台風30号による災害の後、パロの町が復興したか、また貧困脱出のための職業訓練クラスで成果をあげていることを報告した。(3月9日〜20日)

インドネシア Indonesia

- 2025年に洪水と土砂災害で大きな被害を出した北スマトラ州、アチエ州、西スマトラ州に対して、慈済と政府が協力して企画した恒久住宅建設は、2、603戸の建設支援を行う予定で、既に半数の建設が進められている。北スマトラ州タパヌリ県では、3月12日に完成した227戸の抽選が行われ、ボランテアが住民の入居同意書へのサインを手伝った。一部の住宅は、ラマダン明け前に引っ越しができるように、3月半ばに完成させる予定である。
- イスラム教のラマダン明け前夜、民衆が生活ストレスを減らせるよう、慈済は物資と米の配付を行った。3月17日の統計によると43、326世帯に配付された。

メキシコ Mexico

- メキシコ湾岸は2025年10月にハリケーンの影響で、洪水と山崩れの災害に見舞われ、少なくとも10万世帯が被害を受けた。ボランテアは数カ月間続けて、ポザリカ市を訪れて現地調査を行った後、2、965世帯に買い物カードを配付した。(3月14日〜15日)

トルコ Turkiye

- 慈済は途切れることなく国内にいるシリア人家庭のケアを続けている。ラマダン明けの前夜、649世帯に買い物カードを提供して補助した他、マンナハイ国際学校側とボランテアが、学校に通う孤児の学生に助学金を贈呈した。今回の行いは、事故で亡くなった教師のアナスさんとアル・カナウイさんが生前に始めた募金プロジェクトに由来し、学校側とボランテアはその精神を引き継いだのである。(3月16日)

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ニューヨーク支部
(New York)
TEL: 1-718-8880866

香港

TEL: 852-28937166
フィリピン Manila
TEL: 63-2-7320001
タイ Bangkok
TEL: 66-2-3281161-3

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825

玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718

関山慈済病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880

大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000

台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779

台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666

斗六慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段248号
TEL: 886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)
231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770

慈済人文志業センター
112 台北市立德路 8 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989000

静思人文
TEL: 886-2-28989888

カナダ Vancouver
TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo
TEL: 55-11-55394091

イギリス London
TEL: 44-20-88699864

フランス Paris
TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg
TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam
TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg
TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna
携帯: 43-6602053428

南アフリカ Gauteng
TEL: 27-11-4503365

中国蘇州
TEL: 86-512-80990980

ベトナム Hochiminh
TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL: 95-9-260032810

マレーシア
セラランゴール支部 KL
TEL: 603-62563800

ペナン支部 Penang
TEL: 604-2281013

シンガポール
TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta
TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局
TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota
TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman
TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul
TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL: 64-9-2716976

慈済

2026年5月1日発行・352号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済伝播人文志業基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路8号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いです。(日文組編集同人)



ネパール女性のエンパワーメント カースト制度数千年の運命が好転

慈済ボランティアは、仏陀が生まれ育った場所であるネパールに入り、カースト制度と男性優位主義によって制約を受けてきた女性たちに、手に職をつけるようにと技能を伝えている。指先で草編みをすることで、彼女たちは貧困から脱し、自立への道を歩む機会をようやく手にしたのだ。

ネパール・ルンビニ県ラクシュミプール村の女性たちは、2025年3月、「ダキヤ (Dhakiya)」という草編み工芸を学んだ。講師のスブッティ・パル (左) さんが、座布団の仕上げを指導していた。(撮影・林家如)



慈済日本サイト



慈済ものがたり